

《書評》

岡村圭子著『団地へのまなざし ローカル・ネットワークの構築に向けて』 新泉社・2020年

杉田 孝夫

本書は、「草加松原団地の建て替え」という出来事が、「団地という建物・施設を擁する地域全体の街づくりの将来的な方向性や地域住民のライフスタイルそのものが関わる「社会的な」課題」であることを指摘し、さらにその課題が「少子高齢化を前提にした社会関係の在り方、死生観をも問い直す、きわめて根源的な論題」であることに着目して、団地の建て替え・住み替えの過程でローカル・ネットワークがどのように再構築されたのかを検証する。同時にこの検証は、日本住宅公団から都市再生機構に至るまでの戦後日本の住宅・都市開発の理論と実践の歴史の回顧と重なる。

1955年は日本住宅公団の誕生の年である。「nDK」という間取りは、「1955年体制」の生活様式の「明日」を象徴するものであった。1970年代までは2DK、3DKという間取りはモダンであった。郊外の大規模団地の建設が一段落する1981年に「日本住宅公団」と「住宅開発公団」が統合し、「住宅・都市整備公団」が設立され、都市地域における快適な居住環境の供給や市街地開発事業の実施に加え、都市公園の整備といった生活の質の向上が目ざされた。この頃から間取りは「nLDK」という標記が標準になっていく。2LDK、3LDKという間取りは広い居間がついている点で、旧来のDKと比べ広さにおいて大きく改善されていた。その後1999年には「都市基盤整備公団」が設立され、市街地のインフラ整備や都市の防災機能の向上などが設計思想の基礎に置かれるようになった。公団住宅の高品位化が進められた時期である。同時に2000年代以降、1950年代、1960年代に建設された建物が順次老朽化し、築後40年を目途に、建て替え問題が事業課題として登場することになる。2004年に「独立行政法人都市再生機構」として従来の事業を継承するとともに、

都市再生事業や超高齢化社会に対応した住まいづくりや震災被災地復興支援を展開している。

本書の考察対象となっている草加松原団地は、1961年から開発・造成が始まり、1962年12月から63年2月最初の780戸の募集が行われた。全体で5,926戸で、IDK1,376戸、2DK2,208戸、3Kおよび3DKが1,680戸、テラスハウス659戸で、当初は東洋最大規模と言われた。40年もたつと、団地の中の植え込みもすっかり大きくなり、それなりの緑陰を形成するようにもなったが、施設はあちこち老朽化が目立つようにもなっていた。そうしたなか2003年に建て替え事業が始まった。その機運を醸成する役割を果たしたのは、松原団地駅西口に1999年に管理を開始した30階建ての「ハーモネスタワー松原」と草加市立中央図書館の建設であった。

この新しい高層マンションの出現によって、旧来の公団住宅の旧さが際立つことになった。そうしたなかで建て替え事業が始まり、一連の建て替えが完了したのは、2018年9月であった。

松原団地の供用開始からの2年後の1964年に、団地の南側に道路と伝右川を挟んで獨協大学が開学した。獨協大学と松原団地はほぼ同じ時間を歩んできた。その獨協大学もその間に施設の整備とリニューアルを果たしてきており、いま建て替え事業を果たした団地と大学は、草加松原の地に新しい生活空間と新しい学知の空間を演出しようとしている。このリニューアルによって人びとは何を失い、何を得たのか、どのようにして新しい生活ネットワークを築いていこうとしているのかが、インタビューや証言を介して、丁寧に描かれている。

日常生活における安全安心を確保するための最低限の条件はなにか、何か問題が発生した場合にどうやって救援を頼むか、こうしたことは、日常的に多

少顔見知りになっていることが前提として必要であろう。つまり挨拶をする関係が成立しているかどうかである。

賃貸住宅の場合であれば自治会、分譲住宅であれば住宅管理組合がコミュニティを組織し、情報を共有しやすいようにネットワークを整備することも期待される。

たとえば、地域の年中行事や村社の祭礼などへの関わり方も、古くからの地元の住人でなくても、お参りに来る人ならば、氏子の資格アリとして迎え入れる姿勢があれば、ずいぶんと違ってくるであろう。そうしたことの積み重ねのなかで顔と名前が一致する関係が幾重にも形成されていくのであり、時間の

継続のなかでそれなりの共同性がしずかにゆっくりと形成されるのではないだろうか。

団地の内外の壁を越えて、互いの距離感をうまく保ちながらも、多層的なネットワークを形成していくことが、高齢者にとっても生活の安全保障になることが示唆されている。

こうした論点は、各地の団地のみならず、都市のマンション暮らしの人びとにも共通する問題であり課題である。現代では、団地の生活スタイルは特殊な形態ではなく、むしろ普遍的な形態であり、この観点からこそ現代の生活者の生き方の課題と展望が得られるといえる。これが本書から得られた第一の示唆である。